

## 卒後2～3年目の看護師の臨床能力の発展における経験の振り返り

看護部  
徳島大学医学部保健学科

○谷脇 文子  
近藤 裕子

キーワード：臨床能力、卒後2～3年目看護師、経験、振り返り

### I. はじめに

看護専門職の継続教育及び人材育成は、安全な医療の提供と看護の質の保証を基盤として、臨床能力の向上・促進を図ることが重要な課題である。臨床能力の発展についてベナー<sup>1)</sup>は、実践知の発達には臨床的経験からの学びが重要であるとし、臨床での看護実践の説話及び振り返りによる学びの指摘をしている。振り返りの意義・重要性については、自ら看護実践を振り返ることは、実践における問題点の明確化や状況を分析する能力の向上などから、看護師自身の能力の向上につながるといわれている<sup>2)</sup>。卒後1～3年目までの看護師の臨床能力については個別性看護の困難さ<sup>3)</sup>、主体性の育成<sup>4)</sup>、自己教育力の向上<sup>4)</sup> <sup>5)</sup>、アイデンティティの確立<sup>6)</sup>、さらにキャリア発達には他者からの動機づけの重要性<sup>7)</sup>が報告されている。新卒看護師の臨床実践能力の発展に関する研究は多くあるが、卒後2～3年目の看護師を対象に臨床能力の発展に注目し、経験の振り返りを行い、それによってどのように自己洞察がなされ、どのようなことが自己の臨床能力の向上の動機づけになるかについてはまだ明らかにされていない。今回、卒後2～3年目の看護師が臨床で直面した場面をどのように振り返り臨床能力を向上させているかについて検討した。

### II. 目的

卒後経験年数2～3年目の看護師の看護実践における自らの体験や経験とその振り返りに焦点をあて、臨床能力の向上・促進について明らかにし、今後の継続教育や人材育成の一助とする。

### III. 用語の定義

経験とは、臨床の場面でケアにおいて患者と直接的にかかわったり、先輩看護師の看護行為に直接触れる、また実際に見たり、やってみたりすることを指し、感覚や知覚によって直接与えられ体験するものごとであり、このことによって自らが臨床能力の向上に関する看護実践の知識や技術を得ること。

### IV. 方法

対象はK県内のO病院（600床）に入職した卒後経験年数2～3年目の看護師28名で、2001年2月20日～3月9日の期間において、臨床能力の発展に関する成長の場面について記述式半構成質問紙を用いた面接調査を行い、対象に承諾を得てテープ録音し、その後逐語録に記録した。

倫理的配慮として対象者には、プライバシーや研究による不利益を生じないことを説明し同意を得た。

今回の逐語録の分析対象の臨床経験別の内訳は、卒後2年目が3名（大卒3名）と卒後3年目は5名（大卒1名、短大2年課程卒1名、専修学校3年課程卒3名）である。

分析方法は経験した場面の学びと振り返りに焦点を当て、①場面へのかかわり方、②学習の契機、③振り返りの契機、④学習の内容の4点について分析した。この分析にあたっては研究者間で同意が得られるまで検討した。

### V. 結果及び考察

#### 1. 臨床能力の発展に関連した場面について

卒後2年目の看護師は、入職1年時の経験を語っており、それはプリセプター体制による他者からの教育的かかわり、夜勤での患者への対応、癌性疼痛に対する看護などである。卒後3年目の看護師は、医療機器を必要とする患者、急変および緊急時の看護への参加やターミナルの看護場面であり、これらの場面は高度な看護を必要とする場面である。

## 2. 卒後3年目の看護師の「急変時場面」における経験と学びについて

患者が突然呼吸停止を起こした状況の場面では、先輩看護師の指示を受けて強制的に参加し、医師及び看護師への連絡をとるなどの行為を行なっている。この場面では、先輩看護師から直接指導を受けて場面を見ることを通して経験を積むことや、経験を生かすことの重要性・必要性の振り返りがされ、場面の独自性及びケアの個別性の認識がされている。トイレで意識消失した患者への対処では、受け持ち看護師として緊急場面で頸動脈での脈拍測定の経験をし、次に同様の場面に遭遇した時にその時の経験を生かして不整脈の観察を行っている。このように繰り返し経験することで自らの能力の向上を認知している。また、緊急場面で行動を共にする先輩看護師から直接的指導を受けることや、ケアの後で自らの行為を共に振り返ることを通して指導を受けることが重要であると振り返っている。ここでは、知識・観察・アセスメント能力や実践的能力が促進されている。心肺停止患者の緊急入院の場面に自ら決定し自主的に参加した看護師は、他の看護師の行動を観察しモデルとして看護師の行動を学び、後に開催された学習会参加への動機づけとなっている。そして再び体験場면을振り返ることを行い、気づきや学習意欲、関心など内発的な動機づけを高めていることがうかがえる。

## 3. 内発的動機づけにつながる経験の振り返りについて

夜勤を始めたばかりの卒後2年目の看護師は、深夜の頻回のナースコールにイライラした態度で接し、同じ勤務者の副師長から「イライラしていた」と指摘を受けたことにより、副師長が深夜に患者と会話する場面や患者にケアをする姿を、態度で自分に示してくれたものであるとして振り返っている。このことを通して、自己感情のコントロールの重要性や、アイデンティティに関することなど考え、自分との対応の仕方の違いについて振り返りがされている。癌性疼痛を訴え頻回のナースコールのある患者の場面では、共感的言葉かけしかできないでいた卒後2年目の看護師は、副師長から「患者と話をしたよ」と声をかけられ、痛みの訴えの中に患者の不安や恐怖があるのでないかと考え、自らの対応やケアの振り返りを行っている。また、胃癌患者で臨終に近い場面に遭遇した卒後3年目の看護師は、患者家族から「もうだめですか」の問いに、同席していた副師長が家族に発した「言葉」が自分とは異なる反応であったことに関心を寄せ、自分自身が行ってきた臨終のケアに対する自問自答を繰り返し、自己の対応やケアを批判的に振り返ることが行われている。

以上のように振り返りの契機は、いずれの場面も他者を通して自分なりに感じ取ったりしたことや、自分自身の思考の確認など自己内省的に行っていることがうかがわれる。先輩看護師がとった態度や行動に注目し、自身のとった行動と比較して、他者から知らされ気づくことで自問自答しながら、自己洞察を深めていくことで内発的動機づけにつながり、自らの能力を向上させていこうとすることが行われている。このように振り返りは自らの行為を客観的に見つめ直すことができる方法である。この振り返りを行うことで看護師は、自らの体験を積み重ねていくとともに、他者が意図的に教育的かわりを行うことにより、内省的刺激を高めていくことができ、臨床能力の向上を図っていくことができると考える。

臨床能力の発展は、直接みること・参加すること・指摘されることなど、さまざまに体験するものごとの積み重ねにおいて、自らまた他者からのかかわりを受けながら、経験へと繋げていくことである。つまり体験したことを意味づけ、価値づけていくことといえる。経験を振り返ることで経験を意味づけ、積み重ねていくことができ、さらに関心や意欲・向上心を引き出し、自己成長の動機づけを促進していると考えられる。(図1)

## VI. 結論

1. 卒後2～3年目の看護師の臨床能力の発展には、体験や経験場面の振り返りの効果が高いことが示唆された。(図1)
2. 教育・指導を行う場合には、対応やケアが困難である場面を明らかにすることが重要である。卒後2～3年目に対応が困難であった事例を集め、そこにおける実践活動を具体的にプログラム化していくことや、看護実践の振り返りを継続教育として位置づけしていくことの検討が今後の課題と考える。さらに個々の看護師について

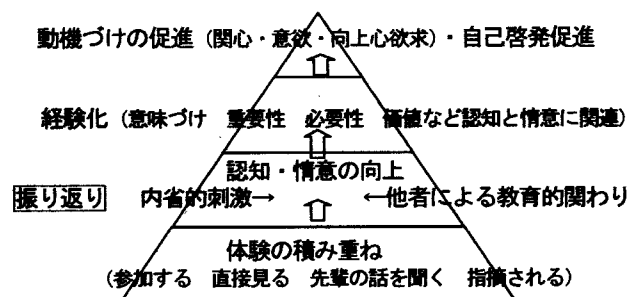


図1 臨床能力の発展における経験と振り返りの関係  
図1 臨床能力の発展における経験と振り返りの関係。さらに個々の看護師について縦断的に経過を追うことで、臨床能力の発展に関する経験の特質を明らかにする必要がある。

引用・参考文献

- 1) P. Benner : *From Novice to Expert Excellence and Power in Clinical Nursing*, 井部俊子, 井村真澄, 上泉和子訳: ベナー看護論—達人ナースの卓越性とパワー, 1-33, 医学書院, 1994.
- 2) Christine A. Tanner : 和泉成子翻訳, 看護実践における *Clinical Judgement*, インターナショナルナーシングレビュー, 66-77, 23(4), 2000.
- 3) 大塚真理子, 小野寺杜紀, 長谷川真美他: 卒後3年間の看護実践能力の成長過程—看護過程展開能力と援助困難の自覚—, 第24回日本看護学会集録(看護教育), 224-226, 1993.
- 4) 長谷川真美, 大塚真理子, 小野寺杜紀他: 看護実践能力の発達と指導のあり方についての検討—卒業後3年間の傾向—, 第24回日本看護学会集録(看護管理), 13-16, 1993.
- 5) 西浦一江, 佐居美加子, 下窪典代他: 卒後2年目看護婦の主体的な学習活動に影響する要因の研究—自尊感情や憧れの関連を分析して—, 第28回日本看護学会集録(看護教育), 19-22, 1997.
- 6) 菊池昭江: 看護専門職における自律性と職場環境および職務意識との関連経験年数ごとにみた比較, 看護研究 32(2), 2-13, 1999.
- 7) 水野暢子・三上れつ: 臨床看護婦のキャリア発達過程に関する研究, 日本看護管理学会誌, 4(1), 13-22, 2000.

〔 平成 15 年 11 月 6 ～ 7 日、津市にて開催の第 34 回日本看護学会（看護管理）で発表 〕